

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XLI)

竹下春日

[XVIII] 17 人間に内在する矛盾——161, 247, 249, 252(60), 253, 257, 259, 395(45・48)。

(1) La. 161-Br. 417 について。——《人間の持つこういった二面性は、だれの目にも明らかなので、わたしたちにはたましいが二つあるのだと考えた人たちもある位である。同じ一人の人物が、こんなふうに、度をこえた思い上がりから、たちまち失意のどん底に転落するといった変わりようはとても不可能に思えたのである。》(Cette duplicité de l'homme est si visible, qu'il y en qui ont pensé que nous avons deux âmes. Un sujet simple leur paraissait incapable de telles et si soudaines variétés d'une présomption démesurée à un horrible abattement de coeur.)

この断章は、一人の人間における相矛盾した《二面性》(duplicité)の存在について、例えば《度をこえた思い上がり》(une présomption démesurée)と《ひどい失意》(un horrible abattement de coeur)とが、一人の人において起こり得ることを、述べているので、「17人間に内在する矛盾」の分類項目に入るべきものである。

(2) La. 247-Br. 438 について。——《もし人間が神のためにつくられているのでないならば、人間が神においてしか幸福になることができないのはなぜだろうか。／もし人間が神のためにつくられているのならば、人間がこんな

にも神に反対するのは、なぜだろうか。》(Si l'homme n'est fait pour Dieu, pourquoi n'est-il heureux qu'en Dieu?/Si l'homme est fait pour Dieu, pourquoi est-il si contraire à Dieu?)

この断章においては、二つの場合が仮定されて、その結果が仮定から導かれる自然の帰結と、矛盾すること乃至これとの不整合が述べられている。即ち、《もし人間が神のためにつくられているのでないならば》、理論的には、人間は神の目的に反する存在であるからして神は人間を罰するのみで、人間に幸福を与えるということは、あり得ないはずである。従って《神においてしか幸福になることができない》ということは、不合理であり矛盾していると、言わねばならない。言い換えれば、人間が神に反する不幸の存在であると同時に神において至上の幸福に到りうるということは、明らかに人間のうちに内在する矛盾と言うべきものである。それゆえ、この fr. は分類項目の17に所属すると、言うるのである。

(3) La. 249-Br. 413 について。——《情念に対する理性の内なる戦いの結果、平和をのぞんでいた人々を二派に分裂させることになった。一方は、情念をすてて、神になろうとし、もう一方は、理性をすてて、野獣になろうとした(デ・パロー)。しかし、かれらは、どちらの方も、望みを達することができなかった。理性はいぜんとして残り、情念の下劣と不正とを追及し、情念におぼれる者の安らぎをかきみだす。また、情念をすてたいと思っている者の中にも、情念はいぜんとして生きつづける。》(Cette guerre intérieure de la raison contre les passions a fait que ceux qui ont voulu la paix se sont partagés en deux sortes. Les uns voulu renoncer aux passions, et devenir dieux; les autres ont voulu renoncer à la raison, et devenir bêtes brutes (Des Barreaux). Mais ils ne l'ont pu, ni les uns ni les autres; et la raison demeure toujours, qui accuse la bassesse et l'injustice des passions, et qui trouble le repos de ceux qui s'y abandonnent; et les passions sont toujours vivantes dans ceux qui y veulent renoncer.)

この fr. の本旨とするところは、冒頭の《情念に対する理性の内なる戦い》(cette guerre de la raison contre les passions) であるからして、この断章は17の「人間に内在する矛盾」の項目に入ると、言いうる。

(4) La. 252 (60)-Br. 443 について。——《偉大さ、惨めさ——人は光を多くもつにしたがって、人間の中に偉大さや下劣さを、ますます多く見出すようになる。／世間一般の人々。さらに教養のある人たち。／哲学者たち。／この人たちは、世間一般の人々をおどろかす。／キリスト者は、哲学者をおどろかす。／宗教とは、人が光を多くもつに依じて、それだけ—そう多く認めるようになるものを、底まで知りつくさせるものにほかならないのだ。さて、それがわかった時、おどろくことができる者はだれであろうか。》(*Grandeur, misère.*——A mesure qu'on a plus de lumière, on découvre plus de grandeur et plus de bassesse dans l'homme./Le commun des hommes./Ceux qui sont plus élevés./Les philosophes./Ils étonnent le commun des hommes./Les chrétiens, ils étonnent les philosophes./Qui s'étonnera donc de voir que la religion ne fait que connaître à fond ce qu'on reconnaît d'autant plus qu'on a plus de lumière?)

この断章のタイトルは、《偉大さ、惨めさ》(*Grandeur, misère.*) となっていて、人間における性格的矛盾を、教養の段階に応じて説いているので、17の「人間に内在する矛盾」の項目中に分類しうる。

ところでまた、この fr. は、《キリスト者は、哲学者をおどろかす。／宗教とは……。》(Les chrétiens, ils étonnent les philosophes./……la religion……?) の文章において、キリスト教徒の性格について、触れている。したがって、われわれは、60の「キリスト教徒の性格 (Sein)」の項目中にも、この断章を配したのである。

(5) La. 253-Br. 412 について。——《理性と情念の間の内なる戦い。／人間に情念がなく、理性だけだとしたら……／人間に理性がなく、情念だけだ

としたら……/けれども人間にはこの両方のものがあり、戦いなしではすまされない。一方とたたかわずには、もう一方と平和を保つことができないからだ。こうして、人間はつねに分裂し、自分で自分にさからう。》(Guerre intestine de l'homme entre la raison et les passions./S'il n'avait que la raison sans passions……/S'il n'avait que les passions sans raison……/Mais ayant l'un et l'autre, il ne peut être sans guerre, ne pouvant avoir la paix avec l'un qu'ayant guerre avec l'autre: ainsi il est toujours divisé et contraire à lui-même.)

この断章の主旨は、冒頭の《理性と情念の間の内なる戦い。》(Guerre intestine de l'homme entre la raison et les passions.) に盡きているので、当然分類項目の17に所属する。

(6) La. 257-Br. 356 について。——《人間は、天使でも、けだものでもない。不幸なことは、天使を気取ろうとする者が、けだものになり下がってしまうことだ。》(L'homme n'est ni ange ni bête, et le malheur veut que qui veut faire l'ange fait la bête.)

この断章は、人間における《天使》(ange) への傾向と、《けだもの》(bête) への傾向との、相矛盾する性向の内在について叙しているので、17の「人間に内在する矛盾」の項目に入る。

(7) La. 259-Br. 215 について。——《危険の外にあって死をおそれ、危険のただ中にあっておそれない。それが人間というものであろう。》(Craindre la mort hors du péril, et non dans le péril; il faut être homme.)

この断章は、《危険》(le péril) に対する人間の矛盾した態度を述べているからして、「17人間に内在する矛盾」のうちに、分類しうる。

(8) La. 395 (45・48)-Br. 660 について。——《この世の欲情が、わたしたちにとって自然的なものになり、わたしたちの第二の本性となった。こう

して、わたしたちの中には、二つの本性がある。一つはよい本性、もう一つは悪い本性である。神はどこにいたもうのか。あなたがたのいない所に。しかも、神の国はあなたがたのうちにある。ラビたち。》(La concupiscence nous est devenue naturelle, et a fait notre seconde nature. Ainsi il y a deux natures en nous: l'une bonne, l'autre mauvaise. Où est Dieu? où vous n'êtes pas, et le royaume de Dieu est dans nous. Rabbins.)

この断章は、《……わたしたちの中には、二つの本性がある。一つはよい本性、もう一つは悪い本性である。》(……il y a deux natures en nous: l'une bonne, l'autre mauvaise.) と、述べている。即ち、善悪二つの本性が、人間には内在していることになるので、この fr. は17の分類項目に配当すべきものとなる。

次にこの断章は、45の分類項目「情念」のうちにも分類されているが、これは冒頭に《この世の欲情……》(La concupiscence……) と情念の一種である欲情に触れているからであり、そうしてこのものは人間の本性 (natures) と、深く結びついているからである。

またこの fr. は善悪二つの本性のことを述べているので、当然48の「善と悪(美德と悪徳)」の項目に入ることになる。

[XIX] 18 気晴らし——128(4), 273, 274, 276, 277.

(1) La. 128 (4)-Br. 171 について。——《惨めさ——わたしたちの惨めさをなくさめてくれる唯一のものは、気ばらしである。ところが、これこそ、わたしたちの惨めさの中で最大のものなのである。なぜなら、わたしたちに自分自身のことを考えないようにさせ、知らず知らずのうちにほろびにいたらせるものは、主としてこの気ばらしだからである。これがなければ、わたしたちはそこから逃れ出るためのもっと確かな手段はないものかとさがし求めずにいられない気持にかり立てられるであろう。しかし、気ばらしは、わたしたちを楽しませ、知らず知らずのうちに死に至らせる。》(Misère.—La seule chose

qui nous console de nos misères est le divertissement, et cependant c'est la plus grande de nos misères. Car c'est cela qui nous empêche principalement de songer à nous, et qui nous fait perdre insensiblement. Sans cela, nous serions dans l'ennui, et cet ennui nous pousserait à chercher un moyen plus solide d'en sortir. Mais le divertissement nous amuse, et nous fait arriver insensiblement à la mort.)

この断章は、実存論上、《気ばらし》(le divertissement)による頹落的実存の真実からの逃亡形態について、叙しているので、文字通り「18気晴らし」の分類項目に所属する。

(2) La. 273-Br. 130 について。——《動きまわること——兵隊とか労働者とかが、自分の苦勞を不満の種にするならば、かれらに何もさせずにおくといい。》(Agitation.—Quand un soldat se plaint de la peine qu'il a, ou un laboureur, etc., qu'on les mette sans rien faire.)

この断章は、fr. 269-Br. 139 の所説に依存している。後者の断章は、長文であるが、その最初の部分は、次の如くである——《気ばらし——人間のさまざまな不安動揺のすがた、宮廷が戦争において人間が危険や苦勞に身をさらしている有様——こういう所から、多くの争いごとや情念、大担不敵な・住々悪意のある企てが生まれてくるものである、——それらを時に深く考察してみても、わたしはよく言ったものだ。およそ人間の不幸というものは、一つの部屋の中に、じっと静かにとどまっていることができないという、ただ一つのことから起こっているのだと。生活に困らないだけの財産のある人が、自分の家にじっととどまっていたり、それで楽しかったら、何も家をはなれて、航海に出かけたり、とりでの攻略に加わったりしないであろう。自分の町から動かずにいるのが耐えられないからこそ、高いお金を出して、軍人の役職を買ったりするのだ。自分の家にじっとしているが、楽しいところではないからこそ、人々との交際や、賭けごとの楽しみを求めるのだ。／……》(Divertissement.—Quand je m'y suis mis quelquefois à considérer les diverses agitations des

hommes et les périls et les peines où ils s'exposent, dans la cour, dans la guerre, d'où naissent tant de querelles, de passions, d'entreprises harides et souvent mauvaises, etc., j'ai dit souvent que tout le malheur des hommes vient d'une seule chose, qui est de ne savoir pas demeurer en repos, dans une chambre. Un homme qui a assez de bien pour vivre, s'il savait demeurer chez soi avec plaisir, n'en sortirait pas pour aller sur la mer ou au siège d'une place. On n'achètera une charge à l'armée si cher, que parce qu'on trouverait insupportable de ne bouger de la ville; et on ne recherche les conversations et les divertissements des jeux que parce qu'on ne peut demeurer chez soi avec plaisir./……)

扱て La. 273-Br. 130 の断章に戻ると、その内容は明らかに上記引用文 (La 269-Br. 139) の主旨と関連しており、人間は《じっと静かにとどまっていることができない》という人間固有の性格を、言い換えたものにすぎない。それゆえ、La. 273-Br. 130 は、La. 269-Br. 139 の所属する分類項目に入ることになる。而して後者のタイトルは、《気ばらし》であるので、前者の断章も、当然18の「気晴らし」の項目に分類されることになる、言わねばならない。

(3) La. 274-Br. 137 について。——《いろいろな熱中の仕方もあるものだが、それらを一々吟味しなくても、気ばらしの中に一切を含めればそれでよい。》(Sans examiner toutes les occupations particulières, il suffit de les comprendre sous le divertissement.)

この断章は、その主旨から言って、18の「気晴らし」の分類項目に入ることは、明らかである。なぜなら、《……、気ばらしの中に一切を含めればそれでよい。》(……, il suffit de les [toutes les occupations particulières] comprendre sous le divertissement.) のであるから。

(4) La. 276-Br. 135 について。——《戦いほどおもしろいものはない。だが、勝利はそれほどでもない。だれでも、動物の戦いを見るのは好きだが、勝った者が負けた者にしつこく襲いかかるのを見るのは好まない。一体、みんなが見たいと思っていたのは、勝利という結果以外に何かあるのだろうか。いったん勝利がきまってしまうと、だれもそれでもう飽き足りてしまう。賭けごとの場合でもそうだし、真理の探求の場合でもそうだ。討論の時には、意見の火花が散るのを見るのは好きだが、一たん見出された真理をさらに深く考えてみることは、全然よろこばない。よろこんで真理を認めさせようとするには、真理が討論の中から生み出されてくるさまを、見せてやらねばならない。情念の場合でも、同じことだ。二つの相反する情念がぶつかり合うのを見るのは、まだ気持ちがいいが、一方がのさばりかえるようになれば、それこそもう厭欲としか言いようがない。わたしたちは、物そのものを求めないで、物を求めることを求めている。だから、演劇の場合でも、恐怖をさそわない、のどかな舞台は価値がない。希望のない惨めさのどん底も、動物的な愛も、冷酷一点ばりの厳しさも、同じことだ。》(Rien ne nous plaît que le combat, mais non pas la victoire: on aime à voir les combats des animaux, ne le vainqueur acharné sur le vaincu; que voulait-on voir, sinon la fin de la victoire? Et dès qu'elle arrive, on en est saoul. Ainsi dans le jeu, ainsi dans la recherche de la vérité. On aime à voir dans les disputes, le combat des opinions; mais de contempler la vérité trouvée, point du tout; pour la faire remarquer avec plaisir, il faut la faire voir naître de la dispute. De même, dans les passions: il y a du plaisir à voir deux contraires se heurter; mais, quand l'une est maîtresse, ce n'est plus que brutarité. Nous ne cherchos jamais les choses, mais la recherche des choses. Ainsi, dans les comédies, les scènes contentes sans crainte ne valent rien, ni les extrêmes misères sans espérance ni les amours brutaux ni les sévérités âpres.)

この断章は、人間の気晴らしとなるべきものの一般的構造を、分析的に解明

している。例えば、《……討論の時には、意見の火花が散るのを見るのは好きだが、一たん見出された真理をさらに深く考えてみることなどは、全然よろこばない。よろこんで真理を認めさせようとするには、真理が討論の中から生み出されてくるさまを、見せてやらねばならない。》(……dans la recherche de la vérité. On aime à voir dans les disputes, le combat des opinions; mais de contempler la vérité trouvée, point du tout; pour la faire remarquer avec plaisir, il faut la faire voir naître de la dispute.) という場合に見られるごとく、人が求めるものは、結論乃至結果(《一たん見出された真理》)ではなく、結果の生じて来る過程そのもの(《真理が討論の中から生み出されてくるさま》)であるということである。

以上は、パスカルの人間考察の秀れた一端を示すものであるが、人の喜ぶ事態としての《気晴らし》に、深く関係しているので、18の「気晴らし」の項目に所属せしめうる。

(5) La. 277-Br. 138 について。——《自分の部屋にいる時以外には、自然に屋根屋とかその他さまざまな職業人となる人間。》(Hommes naturellement couvreurs et de toutes vacations, hormis en chambres.)

この断章は、パスカルの主旨からいって、前出の La. 273-Br. 130——《動きまわること——兵隊とか労働者とかが、自分の苦勞を不満の種にするならば、かれらに何もさせずにおくといい。》(Agitation.—Quand un soldat se plaint de la peine qu'il a, ou un laboureur, etc., qu'on les mette sans rien faire.) と、密接な内的連関を持つものである。何故なら、La. 273-Br. 130 の人間がさまざまな職業人になるのは、自分の部屋に何もせず何時までもじっとして居られない、彼らは気晴らしとしての職業に従事せざるを得ないという意味が、この断章 (La. 277) の要旨のうちには、内在しているからである。

したがって、La. 277 は La. 273 の所属する分類項目と同じ項目——18の「気晴らし」のうちに入ることになると、言い得る。 (XLI回了)